

## 編集後記

- 2016年、西南学院は創立100周年を迎えた。これまで多くの先達が度重なる苦難を乗り越えて、今日の充実・発展に尽くしてきたことに感謝したい。この紀要も10年が過ぎたが、先達の思いを語り継ぐための一助になればと願っている。
- 巻頭言は、パークレー院長にお願いした。巻頭言では、100周年を記念して建てられた「西南学院百年館（松緑館）」が、教育・研究活動、課外活動、校友会・同窓会活動など地域・社会活動の場を提供し、特にこの建物の中に設置された学院史資料センターが建学の精神を伝えるために大きな役割をになうことへの期待が記されている。
- 『西南学院百年史』は、2017年の発行まで残すところ1年となり、多忙となったため、今回の紀要は記録すべき内容に限定することになっていた。その中で、伊佐先生から投稿していただいた「西南学院大学生協の歩み：通史の試み」は、生協の歴史を明らかにするだけでなく、学院史の理解を深めるための貴重な原稿である。
- 昨年の職員夏期修養会の講話と百年史研究会の記録を掲載した。内海先生には2つの講話の要旨をご執筆いただいたが、「私の戦争と平和」では、自身が中学部生徒の頃の戦争体験をもとに語られ、国際理解が平和に貢献すると述べられた。また、「西南グリーの織りなす音楽の系譜」では、男声合唱団であるグリークラブの発足から戦争での中断や部員減少の現在までを百年史研究会で発表された。いずれも語り手が少なくなる中、体験者でなければ語れない内容であった。
- W.M.ギャロットの妻であるD.C.ギャロットは、戦争のためにアメリカに戻った時、日本での体験を南部バプテスト伝道局の雑誌に多数を寄せた。百年史研究会でシャフナー先生は、そのことを口頭で研究発表され、戦争体験を通してD.C.ギャロットは「他人を自分と同じように愛する隣人として考えるなら、戦争で壊れた関係も立て直すことが出来る」と考えていると語った。その内容を原稿に起こした。
- 昨年の10月に西南学院高等学校同窓会「輝西会」が、100周年を記念してシンポジウム「西南学院百年史を編む」を開催し、定年退職された3人の先生をお招きしてシンポジウムを行った。そのパネリストの小林先生、伊原先生、村上先生の3人は、『西南学院百年史』の監修委員、または編纂委員として関わって来られた。今回、新たに発見された資料とともに数々の逸話を交えてお話いただき、その内容を紀要に掲載するため、改めて執筆を依頼した。それぞれにユニークで、貴重な発表であったが、特に小林先生は校名や校章、校訓といった基本的な事項について語られたことは、百年史編纂に関わられた小林先生ならではの発表と言える。
- この4月1日からは、西南学院史資料センターが一部署として百年館内に立ち上がることになった。同資料センターで常設展や企画展を通して、皆さんが学院史に触れ、西南学院を理解してもらえる機会を増やそうと考えている。この紀要の編集業務も同センターに移管され、紀要の次号の発行時期は、『西南学院百年史』の発刊と重なることから、それを記念した特別企画を提案する予定である。(世)